受身型体変術

九構より受身型体変術を行うものなり

空変の型

(一) 体変受身型

前返り

前方廻転

(1) 両手をついて前方廻転

(又) 片手をついて前方廻転　左右

(3) 手をつかわず前方廻転

(4) 飛鳥廻転　両手づき

空転（両手をつき前方　片手をつき前方）

横転（両手をつき横転　片手をつき横転）

廻転（飛び廻転）

(5) 自然

(二)

横返

左右廻転

(1) 両手ついて側方廻転

(2) 片手ついて側方廻転

(3) 手をつかわず側方廻転

(4) 低鼻廻転　空転・横転・廻転

(5) 自然

後返し

後方廻転

(1) 両手ついて廻転

(2) 片手ついて廻転

(3) 手をつかわず廻転

(4) 低鼻廻転

空転・横転・廻転

(四)

前方後身

(1) 膝立位　両手前方後身

(2) 片手前方後身

(3) 立位前方後身　両手

(4) 後身より突き蹴り

(5) 自然

(五)

流水

(1) 垂流（スイリュウ）（立ったまま立に流す）

(2) 左横流水　(3) 右横流水　(4) 巴返し　(5) 車返し

自然の手

(六)

四方　天地飛び

高く飛ばず低く幅を行く事　四方にあり

天地　天は高くあり　天に横身有り　地に逆あり

円飛（これは回転より変化の練習なり）

自然十二支行の変化

(七) 昇天の術
木・柱・塀・人体をかけ昇るなり

(八) 歩行術
(1) 早心早速法　(2) 氷上歩行　(3) 無音の法

(九) 自然行雲流水
何故ここに自然行雲流水をかうるか (一)から(八)までの体変
及身型、自然たる為なり

拳は先ず正しく急所に当てる稽古より始まり拳の
変化 拳体一致の意を悟る　これは鞄嚢の類にて熟達
すべきものなり、古来にては専に藁を巻きその上に布を
巻いて拳を鍛えたり
拳体一如 水拳となるを得るべし

初心五型、五行の型　悟心の型

地の型

(1) 始め自然体　(2) 右向けの体征より

(3) 左手三指突き出すのと右足出すのと同じ、次、左手三指出すのと左足出すのと同時　三指の根の根元に大指が横に一ぽいの型、引いた左手は拳、拇指立てた拳

これを三回繰返す

水の型

(1) 自然体

(2) 右足引いて左手左足前方　左手真直ぐに手刀を出し右手は自分の右側帯の辺に拇指立て左拳の型

(3) 後　(4) 手刀打ち（掌を上に向ける）　(5) 左技

これを三回繰り返す

火の型

(1) 自然体

(2) 右足引いて左手左足前方、左手真直ぐに手刀出し
左手は自分の右側帯の辺に親指立てた拳の型

(3) 受け身

(4) 右手手刀打ち（手掌下向け）

(5) 左技

これを三回繰り返す

風の型

(1) 自然体

(2) 構え

(3) 下段受け

(4) 親指立てた拳にて右突き型　左技

これを三回繰り返す

空の型

(1) 自然体

(2) 構え

(3) 下段受け

(4) 右手上に掲げると右足腰落し高くける

(5) 左技

これを三回繰り返す

基本八法型

骨指三法、捕手五法合わせて基本八法と言う、よくよく稽古すべし、この基本八法正しからざれば武は物にならずと云う又、この基本技八法、万法を生ずと云う

骨指基本三法

(一) 右一文字の構え、右一文字と云うは右手拳方に出し左手拳胸相立て右手の肘関節の上に置くかの如き構えなり

(二) 右手足を廻し腰の方向より左肩に廻す、これ廻す時は必ず拳を変化している事、これは敵の攻撃を防ぐ意なり

(三) 左手足を廻し拳が半開きとなるく相手方の右横首筋に打ち込む 左足一歩前進と同時也

左技の事

これを八回繰返す

右飛身の構え

(一) 左足は右足中関節の所に上げ左手半開き方方に右手拳胸相立てて左手肘関節の辺に位取りの事

(二) 左手左下右廻し左脇辺より左手肩辺に位取り変ず
前の通り拳に変ずること
(三) 左足は敵の水月を蹴込んで前進
(四) 右手拳半開きとして相手方右首動脈に打ち込む
右脇辺より廻り左肩辺に位捕りのこと

• 左技の事

• 右十文字

(一) 左手甲側にして十文字位捕りの事
(二) 右手拳其のまま右上右廻し 右手拇指敵の胸部を
突く、右上に手を半開きで右側に上る。
(三) 左手拳、其ハまま左上廻し左手拇指敵の右胸部を突
く右側半開きにして上る、此時右手は拳に変り胸
部十字型に位捕りの事

左技の事

捕手基本型五法

捕手基本型

(一) 相手方左手にて片胸捕る、我右手表小手逆捕りに
高く上げ右足引く小手廻し下す　この際胸捕りの理を口伝す
受敵右手に対して左手そえること

左技の事

(二) 相手方左手片胸捕り　右手拳打ち来る　我左手拳にて
受ける、同時に右手にて敵左小手表逆捕り(一)の如く
投げこそ大事な事は我小左手胸捕りし手を我が右手
そえにしものを敵左拳打ち来るを右手を中心に体変す、
この練習第一たり

左技の事、

(三) 相手方左手片胸捕り　我小敵左手　裏小手逆に
左手にて捕り　左足引き小手逆の手下に一度引き気心ち
変化　小手上より廻し右足引き右手そつて投げ

左技の事

(四) 相手方左手、我が右手袖口を捕る右手体と共に右へ引く事。
充分大きく上より巻込み逆腕締りると同時、右足膝関節
を蹴り敵を投げ敵仰向けに倒る。
左技の事

(五) 相手方左手、我が右袖を捕る。右手体と共に引き右手内側
より敵の左腕巻込んで左足我が後方に廻し逆投げの事
左技の事

九構

これは上半身の力をぬき下半身の力を生かす構である。

躯構（九構とも呼ぶ）

(一) 不動坐

(イ) 左構　(ロ) 右構　(ハ) 体変術　坐捌の事

(ニ) 精心の動作を行う　(ホ) 基本八法

(ヘ) 掛手基本型変化　骨指基本型変化

(二)

自然の構

(イ) 上半身の力をぬき下半身自由体の事

(ロ) 六法の構　上、中、下段の構有り

六、三、十八型とも云う

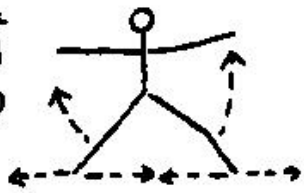
(ハ) 体変術　(二) 悟心の動作を行う

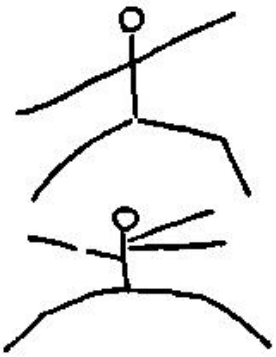
(ホ) 基本八法　(ヘ) 捕手基本型変化・骨指基本型変化

(三)

平一、文字の構

(イ) 六法の構有り　(ロ) 鷹の舞





(ハ) 体変術　(二) 悟心の動作を行う

(ホ) 基本八法　(ヘ) 捕手基本型変化・骨指基本型変化

(四)

一文字の構

(イ)

相手心臓遠当の事

(ロ) 左・右の構　三段の構　上段中段下段とす

上段とは直立・中段とは(イ)の如・下段とは左又は右り

勝を地上につける事により変化潜型の一助とする

(五)

(イ) 体変術
(ロ) 基本八法
(ハ) 悟心の動作を行う
(ニ) 捕手基本型変化・骨指基本型変化
(ホ) 怒虎の構
(ヘ) 左右の構

相手眼遠当の事

(イ) 体変術
(ロ) 上・中・下段有り
(ハ) 基本八法
(ニ) 悟心の動作を行う
(ホ) 捕手基本型変化・骨指基本型変化
(ヘ) 飛鳥の構

(六)

(イ) 左右の構
(ロ) 相手の投げを殺す
(ハ) 体変術
(ニ) 悟心の動作を行う
(ホ) 基本八法型
(ヘ) 捕手基本型変化・骨指基本型変化

練習の事

相手の甲を踏み砕く練習
我が手拳にて甲を打ち砕く
我が前方の足にて浜打ち
相手の足捕りの練習をする

(七) 抱圍の構

(イ) 六法有り　(ロ) 十八型の構

(ハ) 体変術　特に横歩き体変を加える　蟹行きと云う

(ニ) 悟心の動作　両足を蹴り込み練習のこと

(ホ) 基本八法　(ヘ) 捕手基本型の変化・骨指基本型変化

(八) 攻勢の構

(イ) 左右の構　(ロ) 上・中・下　三段の構とす

(ハ) 体変術　(ニ) 悟心の動作を行う　(ホ) 基本八法

(ヘ) 捕手基本型変化・骨指基本型変化

(九) 十文字の構

(イ) 左右中心の三つの構より変化する

(ロ) 上中下段　三段

(ハ) 体変術　(ニ) 悟心の動作　(ホ) 基本八法

(ヘ) 捕手基本型変化・骨指基本型変化

体変術無刀撫型

平の構

(一) 相手方剣をめいて大上段、この剣は斬り下すとも胴にこようとも自由、我小相手と三尺おいて対立

(二) 相手が斬り込む迄対立　相手斬り込む瞬間右足後ろに一歩引く、同時に後身の如く右にかえって立

一文字の構

相手方大刀大上段前と同じく自由斬りの事、敵斬り込み来る瞬間に敵の左横三尺の所に宙返り立つ

敵再び大刀取り直さんとする瞬間に飛び込み左足座し右手拇指水月に当て込む

十文字

(一) 相手方大上段一刀斬り込み来る　自由斬り込み来る

(二) 左右自由に体を転ずると左足引く忽ち左足出す右足引く忽ち右足出す。左右手刀にて首輪打込む

この体変術は無刀捕初心の型とも云ってよい位でここで無刀捕りの基本を熟達する事に有るなり

空拳　十六法

拳

(一) 鬼角拳　前頭部を用う　後頭側部も用う事有り

(二) 手起拳　肘関節を用う　肘関節を多方に用う。一応六法そ小に両手起拳練習

(三) 不動拳　親指外に握りし拳　こ小は やはり多法に用うるものなり

(四) 起転拳　手刀半開き　骨指術の秘拳とも云う

(五) 指針拳　小指を用う

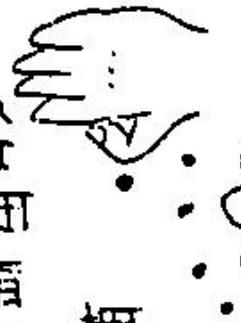
(六) 指端拳　三指を用う　三指一突蹠拳とも云う

(七) 蝦蟇拳　三指　牛角拳有、四指を用うるも有り　即ち樹指即ち小指　五指を用いて突く、又は、五指にて砕拳と変化する　手掌にて打つ変化

多法

(八) 指刀拳　拇指を用う　秘拳とも云う

(九) 指環拳　拇指関節にて突く



(十) 骨法拳　拇指関節用う

これは拇指関節より指刀拳として変化の練習の事

(十一) 八葉拳　両手掌　八葉より仁王拳の練磨

仁王拳より八葉拳への変化の練磨

(十二) 足趨拳　主として足趨　足裏を用いるも足関節を中心

に自由に使う拳なり

刀化、先ず八法蹴り　捲身蹴り練習の事

(十三) 足起拳　膝を用うる　膝を中心の拳なり　刀化

捲身蹴りも練習のこと

(十四) 足逆拳　足指を用うるなり　捲身蹴りの練習のこと

(十五) 体拳　これは体にて打ち砕く拳なり

秘拳已小拳となりの陰りの拳なり

破術九法

(一) 手解き

(イ) 右手解き　片手

相手左手にて我が右手捕り来る　我小我が右手を内側に肘を出す如くして手解きをす

(ロ) 左手解き　片手

(ハ) 両手解き

(二) 体解き

後ヒ後方より抱きつく　我尻を後方にはり　後頭部にて後打・両手上げる事により体解きとなる

(三) 親殺し

右技　後右手にて我が胸握み来る　我小右側に向き後・拇指を後かせて我が右手にて拇指関節殺しにかける　この際我が左手後右手にそ小る・極め・自由の事

A

左技　　左の事

(四)

子殺し

敵　我が胸右手にて捕り来る、我れ左側に体を向け受け小指を突かせ、我が右手にて受け、右手痛み所をつかみ我が左手にて受け、右手小指子殺しにかけて極め自由のこと、

(五)

腰砕き

相手方右腰投げに来る、我が体後方に両手垂げ投げを殺す　練習をすると同時に相手七抜の急所に打ち込む、我小足拳にて打ち込む

自由のこと

(六)

八方蹴り

(一)我が右足にて受け左内催の急所を蹴り当て

(二)我小左足にて受け右内催を蹴り当て

(三) 我小心足後 左足外催 踵研き
(四) 我小左足後 右足外催をける
(五) 我が右足足裏内方に向け足指にて敵金打ち
(六) 我が左足足裏内方に向け足指にて敵金打ち
(七) 変化動作連続

左技へこと

(七) 蹴り研き (A)

・右拳突き来る。
(右) 我小左へ変化右足にて敵拳蹴り打ち
(左)・右足蹴り来る 右 我右上にて蹴り上げ右足踵り当て
右足蹴り来る 我小右足変化左にかわし後金的足踏拳
にて打ち上げ・右足蹴り来る 我小左へ変わし後ケ
左足研り研き

C

蹴り砕き

(右) 受 右足蹴り来る 我小右にかわし 左手にて受右足捕り
逆手そえ 我が右足蹴にて上より受膝関節砕き倒しの事

(左) 左技の事

(八) 蹴り砕き

(右) 受け右足蹴り来る 我小左へかわし 受け左足の急所を
右手拳にて打ち砕き 我が右足又は左足にて受け
右足砕き

(左) 左技の事

(九) 拳砕き

(一) (右) 受右拳突き来る 我が左拳にて受 右腕急所を
砕き受け 我が右拳にて受右拳急所打ち

(左) 左技の事

裏三心を入れる　敵右拳突　我が右拳、仆左捌きと同じ
敵右拳弱筋裏三心打ち砕き、
左技のこと

(二)、変化砕き

イ) 右技　受右拳突き来る　我れ右足拳にて砕き打ち
我が右拳にて受　右拳砕き　受右蹴り来る
我が右拳にて打ち受け　受、我が右足蹴り
受左足急所に打ち込む

ロ) 左技　左技の事

捕手起本捕りの型

・右手、捕

(一) 受右手表逆倒し

イ) 我が脛にて受け右肩に右足入れ受け肘内筋折り

ロ) 我が我右足　受け首締めと受け肘折りの事

(ハ) 我れ左足受け脇を当て込み 我が左足受け右脇に当て受右手折り

(ニ) 表逆極まらぬ場合仆による肘捕り 押え

(ホ) 親捕り 拇指捕りの事

・左技の事

(ニ) 右受け裏逆捕

(イ) 御前捕り 我が左膝にて受け右肘極め

(ロ) 受裏逆を我が体敵頭部に極める事により腕折り となる

(ハ) 我れ裏逆より我が仆にて受け肘を捕る 狭む事により肘関節折りとなる

・左技の事

(三)

坐り型

(イ) 一激相手方と対坐（不動坐）

相手方右手にて我が片胸右足立て来る　相手方の右腕首を握り引く同時に気合と共に右足にて敵の胸部をけり一歩退き残心

(ロ) 相手方と対坐、我れ不動坐、相手方右足立て右手にて片胸捕り来る、我れ右手にて相手方右手裏逆捕りの形に捕り右足相手方の下段に掛ける同時に右手裏逆捕りぐうつむけに倒し右足すねにて相手方右脇ねじ込む

後方に飛退り残心

八法蹴り変化の事

すくい蹴り

(イ) 我が右足にて

拇指にて後ゲ金的蹴込み足腫志所蹴

(ロ) 圧技の事

(ハ) 我が右足 外側に向け後左催蹴り左甲踏み折る

(ニ) 左技の事

(ホ) 我が右足にて後け甲を捕る 水月佛滅蹴りの事

(ヘ) 左技の事

(ト) 足掛い 右技の事 ハは我が右足にて後け右足拓を蹴り掛うなり

(チ) 左技の事

倒

相手方我れに向かんとす 右手三指にて敵の表鬼門に打ち込みそ反動を利用して両足佛滅を蹴り込んで反動をつけ一転回の事

左技の事

抵ッ

抵ピ

相手方近付かんとす 右手手刀敵の右耳ウ戸コを打ち込んで抵びの事 左技のこと

概説

相手方正に来らんとす、我小左足一歩敵の右足前に進め左手刀にて敵の肘戸を打ち右側に倒ぶ、　左技の事

十文字

右拳来る、我小左拳にて打ち受け同じく右拳にて受右拳打ち受け、我小左拳受け佛滅打、我が右拳佛滅打ち倒び込み倒で退き自由の事　左技の事

これは同じ急所二度打ちにより効果大にする練習なり

何にても同じなり

蹴りすくい

敵右足蹴り来る、我小体変により受左足を左手にて捕り引き倒す事

もし蹴りにて何にても可、これは足捕りの練習なり

又方蹴り来る反対の足を蹴り折る技なり

足止め

敵右足踏み来る 我小左にかルしながら、我が右手にて受け
左足捕り 又は左足打ちの事 これは潜型とも言う。

逆技

(一) 竹折 表裏
(二) 表逆
(三) 裏逆
(四) 小逆
(五) 表鬼砕
(六) 裏鬼砕
(七) 武者捕
(八) 武双捕
(九) 大逆

(一) 竹折

左腕関節の逆を捕る事

手も手甲より捕る

掌側より捕るを

半も上より前者表竹折

後者裏竹折

左右 有り

(二) 表逆

敵左手を我が右手にて拇指受け甲に当て捕る

(三) 裏逆

受右手を我が右手にて拇指合谷の急所に当て、もろ返し捕るを云う

右技の事　左技へ事

(四) 本逆

受右手を我が右手にて小指を受け手甲側より尺骨茎状突起関節に当て返し直角とし我が左手そえ垂直逆折の事

右技の事　左技の事

(五) 表鬼砕

受右手首を左手に捕り、我が右手を受右手下より受肘関節を屈曲させ、我が右手と受左手を握る

(六) 裏鬼砕

これは受右手と捕り、我が右手受手上より捕るなり　右技の事　左技の事

(七) 武者捕

これは後左手を我が右手にて抱える如く捕るなり

右技の事　左技の事

(八) 武双捕

これは後ろの左手肘を我が右手にて外より捕りし形なり

右技の事　左技の事

(九) 大逆

これは肩関節の逆を言うなり　右技の事　左技の事

投げ型

(一) 巌石投（口伝）　(二) 抱腰（口伝）　(三) 逆投げ（口伝）

(四) 滝落し（肩負投げ・腰投げ）（口伝）　(五) 大外投げ（口伝）　(六) 内股内掛（口伝）

(七) 跳投げ（手拳・足拳・体拳）（口伝）　(八) 肩投げ（手拳・足拳・体拳）（口伝）　(九) 流水行き（巴投・カ流・横流・手枕）（口伝）

(一) 巌石投

これは後ろの左手下より我が右手を入れて我が肩にかけ我が

右足敵右足前に出しかける技なり　最右落、最右押　最右折りと
変化の事　右技の事　左技の事

(二)
押腰
我が右腰を受け右腰を押うように当て倒すなり、これは、
後手を、我が左手に捕り後左襟を右手に捕りかけるも有るも
我小後の右手捕るのみ又は、我が右手にて捕るのみ　ただ体にて
と云うふうに押う事や一と丁
右技の事　左技の事

(三)
逆投げ
これは後右手を我が左肩にひつぎ逆として投げる
これを逆一とす　逆背負とも言う　肘関節の逆を初心者は、
才一とすべし　次に肩部肘関節の逆を同時に行う
右技の事　左技の事

(四)
瀧落し
何の投げにても我が体より投げ空中に受け体がある時

我が体を少しそらして受けを逆落しの事

背負投げ　腰投げにて稽古の事　右技の事　左技の事

(五)

大外掛

これは我が体を受け右側面に位した時敵右足を右足にて掛け倒すなり　掛さによっては我が左足にて受けを大外掛け倒す也　右技の事　左技の事

(六)

内股内掛け

これは受内股を我が右足にて跳ね上げ我が体廻転、内股にかけ倒す也、また跳ね上げの後受内掛けにかけ倒す也。

右技の事　左技の事

(七)

跳ね腰投

これは受けを押う事の技技げでなく跳ね上げ倒す跳投げとも言う　例、左催投げ

右技の事　左技の事

八 痛投げ

これは、後ケ左石伸滅に痛みを入れ、我れ左足引く事により倒す投げなり 併し相手の急所を当てる事により投げる技なり 右技の事、左技の事、

(九) 流水行き

(イ) 巴投げ (ロ) 立流 (ハ) 横流 (ニ) 手枕

(ホ) 車投 右技の事、左技の事

締め技五型

本流の締めは、締める、締め落す、締め砕く、締め当てる等を基本とす。

・本締め 左手相手才左襟下を持って右手にて相手方右襟上部を充分に親指中に入れ、左襟引き右手首にて締める 左右有り

・逆締め 左手左襟下を持って右手親指襟外にして四指を咽頭に当て押す 左右有り

・痛締め　こゝは頭部痛所を指刀拳にて締めるゝ事ある
併しこの痛み締めとは頭とは限らず　脇締め等略と
してあるもゝ事である。

・三角締め　相手方坐す　前より相手方の左肩方一寸もって
引き倒し込み　右側より廻り三角締め　左右

・胴締め　足で締めるのと、手で締めるのと有り　腕締め
有り、足締め有り　この締めは体締めとも云い、
手足を頭部体を使って自由締めの事

無断転載を禁ず

千葉県野田市野田
初見良昭
白龍翁
電話〇四七二(二二)二〇二〇番

この技に於いて坐型の捌きと同時に押え型の自由なるを会得すべし

一激

相手方と対座し　不動坐　相手方右手にて我片胸突て来る　相手方の右腕首を握り引くと同時に気合と共に右足にて敵の胸部をけり　一歩退り、残心

柳込

相手方　我小不動坐　相手方右足立て右手にて片胸捕り来る我小右手にて相手方右手裏逆捕りの形に捕り右足相手方の下段にかけると同時に右手裏逆捕りでうつむけに倒し右足の水にて相手方右腕抑え込む　後方に飛び退き　残心

腕折

相手方と対坐　我不動坐、相手方右足立て左手にて我片胸捕り来る右手にて小刀状で突かんとす　我小忽ち　右足にて相手方左腕中関節を蹴り上げて腕折る　同時に一方退き残心・この理立技にても同じなり　敵右拳突き来る、我小右え変化　左拳突き

来るも又は捕りて我が右足にて相手左腕折りとす、これは締めに対する反撃である。

金締り

相手方両胸締め来る、我両手にて左右動脈を締め金縛りとす
忽ち前頭部にて敵顔面に打ちつけ左手敵の股入れ投げ

天狗捕

相手方金縛りに左右両手にて左右動脈を締め来る、充分締めさせて左右両手にて天狗捕りにして突倒す

ケッ締

ミチ脈

次後方より三角締めに来る、我小一寸膝を下げ左手にて敵の右脇一寸持ち右手にて敵右手中間節中側を横指で掴みを入れ隙が出る忽ち背負投げ右足蹴込み残心

体締　口伝

これは声　胸筋当てるなり、ここで相手に自由に体に抱きつかせ急所を打ち込み、つかむ事により自由に相手を倒す練習をする

これより、こぶら、弱肘打等を行う。これは敵の蹴りに対する破術であり、
蹴りに対し、こぶら打ち、突きに対し弱肘打ち流小星等の突き落しの練習の事
これは天地人略基本型破術の法とする　前記するも練習を要す

地獄落し

これは敵の右蹴りに対し、我小右に左にかわす、又は左左上腕逆を用
いる場合、我が足にて肘折り膝折りに出る　等この組稽古のみにし
真剣たるべく術を会得すべし。

蹴りに対して

・虚倒

相手方前方より来る、敵右足蹴り来る、我小右腕にて右えぼり体を利
めに交わす、右手に相手方足こぶらを打ち左手相手方足首を持ち
引き右手拳にて後こぶらを打つ　残心。
（左手膝を持ち右足かかとを腕に打ちつける　口伝）

・伏虎（一）

膝逆捕り膝砕とも言う、相手方右足踏み込みにて外側より後ろ
左拳敵急所を打つ（之拳金的打ち）　敵体を押し倒す

・伏虎（二）

相手右蹴り、我小左拳にて受け我右拳にて右足抱打ち受け左足を右足にて蹴り倒す。

投げ返し

・押虚

相手方腰投げに充分掛けんとす。左手掛指相手方右腰七抜に掛指差込み右手拳相手方併滅に当込んで倒す。相手方右腰投げに来ると同時に先ず我小右手後方に開きそる為両手だらりに於て相手方投げさかゆ成

・頭捕

敵顔面右拳にて打ち　方記に紀き頭捕り倒す

・不ッ講ン

相手方右手胸左手袖掴み来り、我小両手ブラリ自然体のまま敵背負投げに来る、我小忽ちて手拳敵の面部打ち左手敵の後腰帯を掴み強く引き敵の背負いにかかる如く敵方足元に抜捨敵は一転回して仰向けに倒れる。

・抗打

相手方右拳打ち来る、左腕にて受け流し右手拳相手方表鼻に当て込み同時に左腕相手方右脇下より背肩に出し左背負い投げ

左技の事

・放擲

相手方左手片胸摑り　右手拳打ち来る、我小左手刀にて敵の右手掌をはね上げ右手敵の左手掌に親指を当て摑み上部に押上げ右脇入れて投げ

・当投げ

相手方左手にて我胸摑る、我小右手にて敵手首打型とし敵の左腕下をくぐる時左手にて敵脇下を掴み引倒す、敵はうつ向けに倒れる左手脇下掴む時脇当ての事　又、後方に向く敵こぶりを蹴り引き倒す。

・抗倒

相手方右手にて胸摑る、同時に右手拳刀筋を左え打込むのと左手親指術減を打込むと同時敵倒れる、　左技の事

これは敵の摑りし上腕を打砕く、又は両脇を突くそして倒すこと。

・飛ニ

相手方我小に向かんとす　右手拇指先　敵左両戸に当入小同時に両足敵の胴をはさみ締めて　忽ち両手にて敵の両足さきを引く　敵仰向けに倒る、右足こぶら則ち足形で痛み締めにす　変化を加える　八葉

・飛ニ倒ス

相手方我小に向かんとす　右手三指にて敵の表冠門に打ち込み其の反動を利用して両足　左右伸縮をけり込んで両手畳に付く反動をつけて回転、元の構にて残心。　回転せり時この際敵倒れしを飛び込み　両足踵伸、縮折り

・生音

相手方右手片胸左手片袖

(一)　我小も左手袖下　右手敵の右襟持つ

(二)　一度左手引き右手片襟めにおて

(三)　右足にて敵の右足充分に敵の右側に出して敵の右足外側踏り返し中間前折りにおて忽ち左足後方に充分引き出して倒す。

・夢枕

敵左手胸右足右拳、最後の右拳右手受えて受け右手にて袖掴み引き左手にて逆襟小手捕しつ　一度一本背負いに出て手枕　左技の事

・両手掛

相手方　両手にて左右動脈を締め来る、我小右手は敵の左肘を下より持ち上げ左手は敵の右肘下より打ち上げ一寸左足引く敵附入る、忽ち右手充分に敵左肘をあげるのと右腕落して入れるのと同じ投げ、

左技の事

・不動

相手方左手にて我片胸掴む、我小下より敵の胸掴む手の拳の辺から、強く掴む、敵右手拳打込む、我小左手受け流し　忽ち我小右手強く敵左手拳の方を掴み竹折り左横に回り左手にて敵左手肩を掴み左え廻し左足引き坐す

敵前向けに倒る。　左技の事

押えの練習も加う　又、右拳の竹折り、掴りも練習の事

・極楽落

相手方右手片胸左手右袖掴り来る、我れ右手敵の左手肘一寸上部の袖を掴り右足一歩引き右手も共に引く心構に出て忽ち左足引くのと同時に左手を敵の左手上より我が右手に協力して敵の左手逆押え込み変化して敵左手背負、又は敵の左足に大外掛けに、捕る、これを地極掴りと言う。

・蹄拳（ケイケン）

敵後方より羽交い締め来る　我胸を落し両腕左右に充分張る、左右手にて左右掌より逆に掴み拇指を手の甲に当てる事忽ち肘手持ち、左右に広げる敵の左手下より左え次けて右手又けにて片手逆投げ、右足けり込み、残心

・雪耀（セツヨウ）

左技の事、　変化の事、　前後、仲

相手方方より来る　右手拳我胸部に来る我れ左手にて受け其の手首を掴う、忽ち右手敵の右手敵の右腕下から巻き掴り敵の右腕逆となり一寸柔に力を入れて折りて極め忽ち右手敵の肩以て腰落し仆して背負い投げ。

・霧散

相手方前方より右手拳、我が水月に突込み来る二寸右え体をひねりかわせ左手にて敵の右手首を捕り忽ち、我が右手拳にて敵の面部を打ち、敵の右腕下を潜りて敵の右手逆となっている其の二腕を右手拳にて打ち折りにして、残心、

・月所

相手方前方より右手拳打来る、我れ左手にて受け手首を掴み我が右足相手水月に蹴り込み　我が右手にて敵右肩を掴み右足後方に引き倒す　　左技の事　　この際受け右体より左体に我が左足を廻し体で受け方右手大逆捕りとす　　口伝、

・片巻

相手方両手拳打ち来る　入込んで両手にて受け止め右手敵の腕外側より内側え巻き込んで左手拇指佛滅に打込み倒す

左技の事

・扣（コーサ）鬼

相手方近付き来る　我れ両手敵の八葉を左右諸共に打ち両足敵の水月を蹴り我れ中返りして元の位置　残心

左技の事　ここで八葉等の使い方　何も両目だけにあらず
両骨法等にて夕霧両佛滅指刀等　八葉と言う凡に両手等
両肘等両膝等　両足等の使い方を修得す
自然は体の行雲流水の悟りを得よと言う事である。

・鵠刈

相手方右手我が片襟左手袖掴り来れ　我小敵の左腕下より脇下掴む。
敵大外に掛る　我小敵にかかりて両足充分に我より右側に捨て流す、
其時充分右手敵の左腕を引く
敵は我が体の上より横倒しとなり其上に馬乗りとなり。本締め
（大外掛ける時　我が左手敵の右脇を掴み　拇指に当入れる）

・自然

相手方両胸掴り。我小自然体体押し来る。押されて両肩両手にて掴み
右足下段に掛け捨身。又。敵が押せば押されと利用して右手拳　忽ち
水月に当て引けば其れを利用して下段に右足掛ける。自然体

背部より

・指砕

敵、右手にて後方より首筋掴む、我小手腰を落し体を半ひねり右手にて敵の右手掌小指より掴む、こは手引けば敵が出る、同時に敵胸部を左拳にて当込み敵の右手を逆に前に掴り、左足充分に引きて坐し投げ敵仰向けに倒れ左右極込む

・殺締（サツケン）

敵後方より力一杯キ締め来る、我小腰と頭を後方に両手を張り充分に相手を前い、忽ち、右手にて敵の右手指先逆掴り右方に体を少ひねり左手拳後向けに敵の面をうち前に出右落しに投げ敵仰向けに倒れる　右足にて蹴り込んを戒心

・金砕

敵、後方より抱きつく　金締、右足後ノ中段蹴、引く、右手腰掴り背負投げ

・雲雀

ここで秘とするは敵右拳突き来るを我小体を落し片膝突いても可、水月又は術減、声を当てる、又、敵の右拳突きに左に変化、我が右肘拳にて受り術を砕くと言うより、三心の拳を三心の体拳として会得すべき秘である。

相手方前方より来る、我小脇と落し、敵の前に一時両手地に伏す、忽ち右手拳にて下より顎を突き上げ、同時に右手にて敵の左脇下を掴み体を落し充分に瞬入小て岩石落し

・気倒

敵右蹴り来る、我小左え変化足金的又は肘撞にてもよし、当て我肘にて撞の当て、後ケ突き倒す、両拳よしとす
これ後ではまた足白日拳の事、又気の抜く向に違拳、例えば右手の拳にて仏滅に当て右手掌拳にて同じく仏滅に当て右肘拳左手そえ、仏滅を砕く三拳一刻の気合拳と修得させるべきものなり

・四方捕

右足一歩引き敵の右拳、左手後ケ其腕首を掴み右手敵の右腕下より我左手上に重小て鬼砕きにして、一度右足引き忽ち変化右脇入小て二本背負投げ、又裏鬼砕きの稽古もすべし、裏鬼砕き大外掛とす、この四方捕りは鬼砕きの変化、鬼砕に対し大逆、極楽、無双、無淵、表逆、裏逆等、変化一刻の四方捕りとす、この大逆は、裏鬼砕より我が右手後ケ肩をつかむ事により我が右足引き後方向けに倒すなり

・猶

(一) 敵の拳は必ず中関節 星又は弱骨を打ちて受ける事を
骨子とす・ 又足も必ず拳にて推捏抱の痛究を打ち込んで受ける

(二) 最後に、我に敵技を掛けんとする時 一歩引いて構えとなし
敵に入り込ませ、受けたる手にて敵の袖又は手首を掴む事出
来ざる時は又一歩引退の事

(三) 敵の隙を見て、右手龍門、雨戸、極楽等に当入小忽ち左腰入小
投げ左手にて当て込みし時は右腰入小投げ
・又、九鬼捌に於ては、一受より二受けを強く二より三受を入り
込み強くと言うようにはける事 口伝 ここで乱捕の稽古の事

この虚空より玉虎の技は敵に対しく玉となり近くに遠くに有るも同
じく隠小たる秘技を会得する事ヤ一なり 飛鳥の術を会得す
べし

・虚空

故右手拳面突き来る 我小左腕にて敵の右拳受け忽ち右手刀に
て、敵の右手星の下を打折る。 敵右足にて蹴込に来る 我小
左足にて敵右足下より蹴上る 同時に左手 拇指にて 敵佛滅に
当込んで残心

・輦輿（レンヨ）

敵左手拳面部に打込み来る　我小左腕にて受ける　敵右足蹴込み来る　我小敵の右足を右足にて蹴上る　敵右手にて我が片胸捕る　我小右手手刀敵の右両戸を打込んで其の右手首を持ちくゝる同時に右足我が後方横に引く　敵の右手を逆捕りにしく一寸敵を俯向けに捕え　忽ち変化して左手敵の右手肘の處を掴み引くと同時に再度我右足蹴込み倒し残心

左技の事

・逆流

敵右手拳打込み来る　我小左方に一歩体を転じ右腕にて受ける、敵右足蹴込み来る　我小右足下より蹴上げ同時に敵の右手を左手にて、右逆捕りにする

敵左拳水月に来る　我小左拳を右腕に受け　忽ち右手刀敵の右首両戸に打込み　左手表逆捕りに締め逆倒しの事

左技の事

・鳥鶴（カサガ）

敵右手拳打込み来る　我小左側一方体を転じ右腕にて受け忽ち敵の袖を掴み引く

・敵右足蹴込み来る　我右足にて横蹴りに敵の足を受け　忽ち

右手袖持つ手を上に敵の右手を上にあげ　左手拇指敵の右脇を当て込み同時に敵の右手下をくぐり　敵の左横に出て左手敵右手首持ち投げ、敵仰向けに倒る　右足蹴り込み　残心

左技八手

棹（サオ）

敵右突き来る切り外す　我小左脇にて受け　忍ち袖掴む　敵右足蹴込み来る　我小脇を落しき右脇にて右を受けた左手つけし袖を下に引く　この際右手足をすくい上げると同じ三拍子左足引いて坐す　残心

ここで先ず右蹴りに対して左を変化し受ける際、我が右肩を蹴り位置を担ぐ　練習をすべし　左技八手

抓（ソウ）倒（トウ）

相手方近付き来る　我小両手敵の襟上を掴み　両手拇指左右襟を下に押しかいくぐ　我が方頭にて面打付け右足敵の声に掛けて早変しにて、我が敵と共に一転回り返りして馬乗りになり締め　残心

乱雪

相手方近付き来る　両脇下を掴み鬼門当て同時に敵の両足の中に我が身体を流し込む　敵はうつむけ顔面地上に打ちつける　左技横流小の事

無刀捕型

、、で今迄の技に武器を持たせる事により無刀捕り型として稽古さすべし、この無刀捕型を体術の根本と言っても過言ではない、、この無刀捕を会得する事により武器を自由にし己れ拳となり剣となり槍となり砲となり空となるのである。

・拳流し

敵石小刀突き来る我小左に体変我左手にて右手を捕り右手にて受、右手甲を打ち小刀を捕ばす我小表逆に倒す

・目潰し　・手裏剣　・鉄盤　・こ小等を体変と共に圧かす事とす

なす技を己が力と人は云う
神の導く身と知らずして　神韻

・鼠逃遁甲の型

この型の用意として黒衣の左内側にポケットを付けて置く事、この中に目潰・練習用粉末を入れる事　又鉄板九枚、もう一つのポケットに秘める事

神人一如の巻とす　ここで不火土金水五遁の遁型の秘を会得すると同時に己れ空となる真の忍法体術　即ち武の根源とさ

小太刀の秘を会得する事である。　ここに基本八法有るかと問えばなし　基本八法正しく修業するかと言うに正しくなく但、神ながらの自然の動静を悟り己れ空となるを、よくよく練磨すべし

窟逃道甲之型

(一)片腕道走型

・右腕道走型

相手方左手にて我が右手首を持つ引きーせんとす　仍ち投げ咎を消すと云うのが実対だが世としては　手首を持たれ一歩二歩我が方へ引き三度目に怨ろ右手首竹折りして高くあげ右足にて敵の下段を蹴り込んで左足廻って片手投げ眼遣しを撒いて抵び退き、ユに隠れる　土道の事

・左腕道走型

(二)左右道走型

・左道走型

相手方右手にて我左手首を持ち引き込み、捕えんとす、前と同じく三度目左手にしく竹折り右手を相手の右腕掴み左脇入落し、次に左蹴り込み左脇落し入れ投げ前と同じく眼つぶし　抵び退く　地に隠れを消す

・右逆走型
・右手首筋逆走型

(三) 首筋逆走型

相手方右手にて後方より我が首筋襟を持ち引き止める。一度二度後方に引かれ、我小右手は相手方右手上に乗くのせ、三度目に右手にて逆手捕りをしつつ左手肘にて水月を当込んで片手投げ次に目遣し退つて土逆の事

左技の事

(四) 当込逆走型

相手方大刀大上段 我は腰を落し、左手手刀形 真直ぐ出し右手後右肩方面に拳指指立つて、八文字の構えせ、相手方に気合打込む、其一歩先、抵込んで右手掴指にて水月に当込み倒し右横に抵ぶ 眼遣し 不逆の事、

(五) 小手打逆走型

相手方の大刀大上段、我小、八文字の構、相手切り込む、左え変りして我が右手刀にて二の腕に打込む(流) 敵刀を落す左手拳にて敵の右脇当込む 敵倒る 眼遣し左横抵ぶ不逆の事、

(六) 右打道走型

相手方大分正眼に構える、我小前の如く八方の構え相手方気合諸共突きに来る、我小右に体を転じ右手刀にて相手方正面の腕を打ち、左手にて方のこじりを掴んで引き取り忽ち右手眼しをさき、右き飛んで不道の事

(七) 左右雲隠の型

二間ほど離れた所、左右より敵大分大上段に来る、我小始めより左右の手に人知れず眼道しを握り両手拳の型にして八方隠小の構え、八方隠小とは、充分腰落し、両手頭上一寸上に服を掲げたる構え、相手方正に進み来り、切り込まんとす、我小じりじりと二、三度後え退き忽ち三間眼道し忽ち飛込んで内手拳にて当込むと同時前に中返り二回　不道の事

(八) 攻撃防隠小型

相手方前方二、三間四人大分切込まんとす　正眼上段等に来る、我小道走の構え、道走の構とは右足前方左後向後方に逃げかん、とする構えにて左手鉄板人数だけ持つ　敵正に来らんとする、忽ち鉄板投げ、敵のひるむに同時に飛込み　眼道しをさき前方敵の向を中向を中返りして不道の事

八方霧隠小型

相手方三人　後ニ八ニ小ハ何人にても同じ事、方ト同じ　又
我小方方に進みつつ鉄板投げ方に投げる、後方の敵方を
助けんと切込み来る、後方に脈道しして空間に飛び不道の事
且レこの木道は片足立てかがみ鉄板投げの型にて即ち再び
現われたる用意の構なり　これ我忍構えと云う。

―終―

無断転載
複写を禁ず

初見良昭

発行所
武神館総本部
〒278
千葉県野田市平野町一三六
〇四七一　二二　二〇二〇